「ハーレー　クリシュナ　ハーレー　クリシュナ　クリシュナ　クリシュナ　ハレ　ハーレー」

ぼくたちの前に現れたのは、原宿だった。
カラフルで、四角い、おしゃれだねという恰好をしていた。服は毎日違うものを着るらしい。
靴は裸足で、帽子は高く、伊達メガネ。
度が入っていないメガネを伊達メガネという。
伊達メガネをかけた風景と、ピンボケしたメガネをかけた風景とを、頭の中で比べてみたが、どっちが良いというわけでもないように思った。
すれ違いざま、「きれい？」「うん、とてもきれい」「うん、ありがとう」
そう聞こえるなり、ぼくたちが歩いていた道なりを、いとも簡単に通り過ぎていった。
後姿が、？？？のシルエットになっていた。

ぼくたちは、つないでいた手を、すっかり離していた。

きっと彼女も疲れたのだろうか。ぼくもそうだ。
見慣れていない光景を目の前にすると、目がすごく疲れる。
額に汗もかいていて、秋という頃が来ているのに、もう目を覚ましている。

気分を変えて、路地に入る。
路地は、静かで、昼過ぎだというのに、たくさんの人がいない。
目が自然と、慣れようとしていた。
目が悪いというのは、叢雲がかかっているように見えるのだが、自然と慣れてしまうと、それが、とても綺麗に見ることができる。
彼女がぼくにこう話をした。
「月の裏側に来たような、気分にならない？」
ぼくはそうだと思った。
「うん、そんな気がする」
そうして、たくさんいろんな話をしながら、広大な芝生を駆けた。

けっこうな時間を歩くと、行き止まりではないのに、そこにベンチがあった。
長方形のベンチで、白を基調としたベンチで、赤の水玉模様のベンチだった。
疲れてしまったぼくは、そのベンチに腰を落とした。
丸かったお尻は平べったくなった。

少し目を瞑ると、西の空が映ったので、
さて、となりの彼女に話しかけてみようとした。
というのは、くだらない考えに傾聴してくれるのは、彼女の優しさであって、ぼくにとってのベンチだからだ。
原宿を見たとき、ピカソの絵みたいに、顔と服が合っていなくて、とてもおかしかった。
そういうことを彼女に言おうと思った。
「変だったよ」
そういったら、ぼくの彼女は「でも、不忍池も変だったよ」と言った。

「月の中に、月が見えないのは確かに変だ」
彼女は、「でしょ」と言った。
ベンチに座りながら、すっかり話していた、ぼくの左手と彼女の右手が、自然とつながれたときには、原宿の白い夜に、丸い月が昇っていた。